



自重知らずの
転生貴族は、現代知識チートで
どんどん商品を
開発していきます!

2

◆ 著 潮ノ海月

◆ 絵 たき



カイロス

シオンの同級生で、
アシュラム王国の王太子。
まっすぐな性格。

クラウド

シオンの同級生で、
ファラレスト皇国の第二皇子。
クールで冷静沈着。

シャルロット

魔法学院でのシオンの同級生。
明るく元気なイシュカルド帝国の
第三王女。

リムル

自由奔放なサキュバス。
アグウェルの娘で、
シオンに惚れこんでいる。

レミリア

シオンに仕えるハーフエルフ。
元凄腕冒険者で、シオンを
支える。

シオン・
ディルメス

前世の日本での記憶を持つ侯
爵家の次男。女神から貰った
《万能陣》を駆使して様々な商
品を開発し、商會を立ち上げ
る。推薦を受け、サイフォン魔法
学院に入学することに。

第1話 久々の自宅へ！

僕の名前はシオン・ディルメス。

ブリタニス王国の北部に領地を持つディルメス侯爵家の次男として生まれた。

前世の日本で、社畜の人生を送っていたのだが、不幸な事故で自室で事切れてしまった僕は、女神様の厳正な抽選に当たったらしく、この世界——エクストリア世界に転生した。

女神様に転生させてもらったけど、肉体を強化したり、派手な魔法を放ったりできるようなチート能力は授かっていない。

その代わりに、《万能陣》ばんのうじんというチート能力を手に入れた。

僕にしか描けない魔法陣を描き、それに触れた物質をイメージ通りに変化させられるという能力だ。生身では魔法を使えない僕でも、この《万能陣》で生み出した魔法陣に魔力を通せば、疑似的な魔法を発動することができるのだ。魔法陣を描くっていう一手間があるから、普通に魔法を使うよりは不便だけだね。

そして僕は九歳になった頃、戦に巻き込まれた侯爵家の財政を救うため、この世界にはない商品を扱うロンメル商会を設立。商品は次々にヒットし、かなり儲けることができた。

ずっとメイドとして僕の傍にいたレミアや、僕の商会の噂を聞きつけてやってきた魔族のアグウェルにその娘のリムル、他にもいろんな仲間が増えて、ロンメル商会は今や大所帯だ。

もちろん、順調なことばかりでもなくて、他の商会とか、王都ブリタスの商業ギルドのギルドマスターから横暴な要求をされたこともあった。

でも、その頃には僕は王家の後ろ盾を得られていたので、逆にギルドマスターの不正を暴いて更正させることに成功。そのことが商業ギルドに評価され、ロンメル商会はゴールドクラスに認定される。

その後、イシュガルド帝国の帝都イシュタルにある商業ギルド東支部で表彰を受けることになり、僕は船で海を渡った。

そこで支部長のリンメイさんに挨拶したり、新しい仲間が増えたり、商人の友達が増えたり、女性向け衣服の新しいブランド『シグリル』シリーズを作ったり、ダルシオン王国に移動したり……

ダルシオン王国でもロンメル商会の商品は人気だったんだけど、人気過ぎて、ダルシオン王国の国王が宰相を通じて、「シグリルを王国の特産品にするために製法を教えろ」とか言い出した。

もちろん僕は「それならダルシオン王国から撤退する」と言って拒否。

そのことで宰相が商業ギルドに泣きついて、リンメイさんに迷惑をかけることになってしまった。事情を説明するためにイシュタルに向かったら、リンメイさんは僕の味方をしてくれて、ダルシオン王国の王城とロンメル商会の間で、期間限定の契約をすることを提案してくれた。

というわけで、商業ギルド経由で、ダルシオン王国に契約の話伝えた僕は、ひとまずダルシオン王国のダルトンに戻ったのだ。

王都ダルトンに戻って二週間後。

執務室に入ってきたレミアが封書を差し出してくる。

手紙の内容を読むと、ダルシオン王国のグラントル宰相からの呼び出しだった。

「おお！ よく来てくださった！」

レミアと二人で赴くと、大いに歓迎された。

話を聞いていくと、どうやらリンメイさんの提案を受け入れるようだ。

ということと結局、三年と期限付きではあるが、ロンメル商会はダルトンの衣服職人に商品を卸すことに決まった。いずれ、職人達が卸された商品に色々な装飾を施し、ダルトンの街で売り始めることになるだろう。

また、『シグリル』を量産するための工場も、建設してもらうことになった。もちろん、僕が魔法陣を用意する必要はあるけど、おかげでいちいち他国の工場から商品を持ってこなくて済みそう。

そんなわけで、契約が締結してからすぐに工場の建築が始まった。一カ月も経つ頃には、ダルトンの衣服職人達によって加工された『シグリル』の商品が、市場に回り始めるだろう。

そんなある日、執務室で本を読んでいると、レミリアとアグウェルの二人が扉を開けて入ってきた。

姿勢を整え、アグウェルは懐から封書を取り出す。

「リンメイ様からのお手紙です」

「この前会ったばかりなのに、何だろう？」

手紙の内容を読むと、この度のダルシオン王国との契約で、ロンメル商会の商会ランクが、無事にシルバーからゴールドに上がったことが記されていた。確かに、そんなことを言っていたっけ。

そしてサイフォン魔法学院への編入試験の手続きも済ませてあるので、帝都イシュタルまでテストを受けにくるようにと追記されていた。

そういえば、リンメイさんから魔法学院に通うことをすすめられていたんだよね。

興味はあるけど……僕は《万能陣》を介してでないと、魔法を発動することができない。

学院に入学すれば、普通に魔法を使えるようになるかもしれないけど、女神様によつてかけられた制限だから無理だよな。

それに……商会の仕事もあるし……

レミリアやアグウェルの意見も聞いてみたいな。

僕は隣に立っているレミリアへ手紙を渡す。

一読した彼女はニッコリと微笑んだ。

「まずはランク昇格、おめでとうございます」

「ありがとう。それでサイフォン魔法学院の編入のことだけど、レミリアはどう思う？」

「サイフォン魔法学院には、イシュガルド帝国だけに留まらず、大陸中から魔法の才を持つ生徒達が集まっております。シオン様が学院に編入されることは、私もとても嬉しいですよ」

レミリアは元冒険者のハーフエルフだ。

僕が幼少の頃に、ディルメス侯爵家に雇われ、僕の専従者としてずっと傍にいてくれている。どんな時でも僕の味方してくれる、僕のお姉さんみたいな存在である。

元冒険者だからこそ、魔法学院の価値をわかっていて、喜んでくれているのだろう。

「そっか……アグウェルは？」

僕の言葉を聞いて、アグウェルは胸に手を当て頭を下げる。

アグウェルは魔族の公爵で、僕が転生者と知っていながら、僕の従者を務めてくれている。魔族だけあって、知略に長け、人族も知らない高等魔法も使うことができる、とても優秀な僕の仲間なんだ。

「サイフォン魔法学院には、高位貴族の子女も多くおられます。その方々と学問を通じて縁を結ばれるのも、シオン様の今後に繋がるでしょう。ロンメル商会の運営については私にお任せください。ここ、ダルトンの店舗は、オルデンとサイゾウに運営を委ねてもよろしいですよ」

ロンメル商会の経営も順調だし、僕がサイフォン魔法学院に編入しても大丈夫だよな。

その後も僕達三人は話し合い、帝都イシュタルに向かう前に、ブリタニス王国に戻ることにした。アレン兄上にも会いたいし、父上にも報告しておきたい。

アレン兄上は僕の二歳年上で、ブリタニス王国の王都ブリタスにある、デイルメス侯爵家の別邸に住んでおり、貴族学院に通っている。

デイルメス侯爵家を継ぐのは長男であるアレン兄上なので、僕は成人になれば家を離れなければならない。

以前は、どこかで手柄を上げて新しく爵位を貰うことも考えていたけど……ロンメル商会を立ち上げた今となっては、このまま商人として頑張っていくつもりだ。

ということで、僕、アグウェル、レミアアは、アグウェルの娘であるリムルも連れて、四人で父上のいるデイルメス領に向かうことにした。

「二人共、後のことは頼んだよ」

「任せておけ。問題があればグラントル宰相と交渉して対処するから」

「もっと商品が売れるように頑張るでござる」

ダルトンの店舗を任せることになったオルデンとサイゾウの二人に見送られ、僕達四人は店舗の執務室に設置されている、姿見の転移ゲートから、父上の邸へと赴いた。

この転移ゲートは、僕が《万能陣》を利用して作った、離れた場所を繋ぐ門のようなものだ。今

ではいろんな国に、ゲートを設置している。

僕が描いた魔法陣は、僕以外の魔力でも起動するので、このゲートを使って商会の皆が移動することもできる。

というわけで、デイルメス領にある邸の、僕の部屋に転移してから、父上の部屋へと向かう。

扉を開けると、そこには政務中の父上がいた。

「父上、お久しぶりです」

「おお、ダルシオン王国から戻ってきたか。以前にレミアアから報告を受けてはいたが、シオン本人からも詳しく話を聞かせてくれ」

「はい。ご報告いたします——」

久しぶりに会った父上は元気そうで、ニコニコと微笑んでいる。

その笑顔に嬉しくなって、僕はダルシオン王国で起こった出来事について、丁寧に話していった。ダルトンにあるオルデンの店で、ロンメル商会の商品を販売し、順調に売れ行きを伸ばしたことだけドクレイム商会とダルシオン王国の財務大臣であるモルキス伯爵に狙われたこと……これらを説明すると、父上は眉間にシワを寄せ、厳しい表情に変わる。

「どの国にも、金儲けのために汚いことを画策する連中はいるものだな」

「はい。でも心配には及びません。商業ギルド東支部支部長のリンメイさんが駆けつけてくれて、すぐに解決してくれました」

「そうなのか……商業ギルドの支部長と懇意こんいになるとは、よき出会いもあつたのだな」
 商業ギルドは世界中に支部があり、この世界で商売をやっていくには、無視できない存在だ。しかも大陸の東エリアをまとめる支部長のリンメイさんと仲良くなれたことは、父上の言う通り、まさにいい出会いだった。

それから、オルデンの商会がロンメル商会のダルシオン王国支部になったことや、ダルシオン王国の王城とも期限付きの契約を締結したことを説明すると、父上は顔を綻ほころばせた。

「ダルシオン王国での商売に成功したこと、嬉しく思うぞ。さすがは私の息子だ……それで、今回は休むために戻ってきたのか？ そうだ、シオンが来ていると知れば、ファイネ殿下、セレーネ王妃も喜ぶだろう」

この国の王女であるファイネと、王妃のセレーネ様とは、ロンメル商会の商品を買ってもらっていることもあり、懇意こんいにしている。

せっかく戻ってきたんだから、挨拶しに行った方がいいだろう。

その前に……

「ちよつと相談事というか……報告がありました」

「シオンはいつも忙しいな。それで、どんな報告だ？」

「僕、サイフォン魔法学院に入学したいんです。リンメイさんが渡りをつけてくれました」

父上は驚きの表情を示す。

「イシュタルの魔法学院といえば、大陸でも有名などころではないか。まさかシオンが入学できるとは考えてもみなかったが」

「シオン様は優秀ですから」

父上の感想を聞いて、レミリアは誇らしそうに豊かな胸を張る。

すると父上も笑顔になった。

「サイフォン魔法学院へ入学したいのだな」

「はい。編入試験に合格する必要がありますが」

「シオンなら大丈夫だろう。グランタリア大陸のイシュガルド帝国を中心に周辺諸国から集まった魔法の才のある高位貴族の子女達が多く在籍していると聞く。その子供達ともよき学友になれるかもしれないな」

魔法は才能さえあれば誰でも使えるものだけど、一般的に、高位貴族の血筋ほど、才能があると
 言われている。より才能のある者を一族に迎える傾向があるからだそうだ。

「ロンメル商会の販路を広げるためにも頑張ります」

「そういう意味ではないのだが……シオンらしいな。わかっていると思うが、くれぐれも騒ぎを起
 こすんじゃないぞ」

なんだか、父上の僕を見る目が変な気がする。

翌日になり、僕は一人で姿見の転移ゲートを使って、王都ブリタスにある別邸へ移動した。応接室に転移すると、アレン兄上とフィーネが、紅茶を飲みながら寛いでいた。

アレン兄上は僕を見て目を丸くする。

「シオンじゃないか。戻ってきたのか？」

「はい、昨日、父上に挨拶してきました」

「そうか。けっこう長くいたようだけど、これからはラバナネス半島に落ち着くのか？」

「いえ、実は帝都イシュタルへ行く予定になっっているんです」

するとそこで、フィーネが首を傾げる。

「ダルシオン王国の次はイシュガルド帝国へ行くの？」

「サイフォン魔法学院へ編入しようかと。試験に合格すればの話ですけどね」

「ちよつと待って、お母様に知らせてくる！」

フィーネは勢いよくソファから立ち上がると、応接室の姿見のゲートに駆けこんでいった。

その姿を見送り、僕は肩の力を抜く。

「フィーネは相変わらず元気ですね」

「たまには俺と立場を変わってくれよ。シオンばかり色々な場所に行けてズルいぞ」

「アレン兄上は貴族学院に通っているじゃないですか。だから僕も魔法学院に通ってみたくなくなっただけです」

「そういうことなら仕方ないか」

うんうんと頷いた後、アレン兄上は優しく微笑んだ。

それからしばらく二人で談笑していると、転移ゲートの表面が歪み、フィーネとセレーネ王妃が現れた。

そして王妃が走り寄り、僕の体をギュッと抱きしめる。

「フィーネから聞いたわ。またイシュタルに行くなんて、どうしてジツとしてられないのかしら」

「モオガ……モグウ……」

「お母様、シオンが胸の中で溺れています。このままだと息が止まっちゃいますよ」

「もう、ずっとこうしていたかったのに」

フィーネに腕を引かれ、セレーネ王妃は不満を表情に出す。

僕は空気を胸いっぱい吸って、息を整えた。

苦しかったけど、いい匂いがして幸せだったかも……

気持ち切り替え、頭をペコリと下げる。

「ご無沙汰しています、セレーネ王妃」

「そうそう、ダルシオン王国での日々のことを聞かせて」

「では僕は紅茶と茶菓子を運んでくるように、メイドに伝えてきます」

「それなら私、マリナ女王を呼んでくる」

アレン兄上が立ち上がると、フィーネがそんなことを言い出した。

マリナというのは隣国であるナブラスト王国の女王だ。

ナブラスト王国の王城にあるマリナ女王の私室にも、転移ゲートは設置してあるからね。

フィーネと同じく、マリナ女王も公務を抜け出して、アレン兄上と遊んでいるから、三人は仲が
いいのだ。

「フィーネ、待ちなさい。陛下もきつとシオンの話を聞きたいはずです。皆で王城に移動しま
しょう」

「僕も一緒に行くのでしょうか？」

セレーネ王妃の提案に、アレン兄上は戸惑いの声をあげる。

するとセレーネ王妃は安心させるように微笑んだ。

「いつもフィーネと遊んでくれてありがとう。陛下も喜んでいるわ。さあ、私の部屋へ行きま
しょう」

セレーネ王妃はサツと身を翻し、姿見の転移ゲートを通り消えていった。

その後を、小さく手を振ったフィーネが続く。

僕は目を白黒させているアレン兄上の手を取り、後を追った。

ゲートを潜り抜けると、フィーネの可愛らしい豪華な部屋へと出た。

周囲を見ていると、フィーネが頬を膨らませる。

「女子の部屋を見回さないで。散らかしているから恥ずかしいでしょ」

「メイドさんが掃除してくれているから、綺麗だよ」

「シオン、そういう問題じゃないから」

そんなことを言い合う僕達に、セレーネ王妃が苦笑する。

「ほら、三人とも騒いでないで、私の部屋に行くわよ」

「はい。あ、私、マリナ女王を呼んでくるわね」

フィーネが姿見ゲートから去り、僕達は部屋を出る。

長い廊下を歩いていくと、扉の両脇で警備している近衛兵にセレーネ王妃が声をかけた。
どうやら、ライオネル陛下へ僕達が王城に来ていることを伝えるようにしているらしい。

すぐに現れた王妃の私室に入り、僕とアレン兄上は並んで豪華なソファに座る。

対面に座ったセレーネ王妃は、部屋付きのメイドに声をかけ、紅茶とスイーツを用意してくれた。

しばらく待っていると、フィーネとマリナ女王が部屋に入ってきた。

マリナ女王はセレーネ王妃に挨拶をし、ソファに座り、ジツと僕を見る。

「戻ってくるなら、真つ先に私に会いに来るのじゃ」

「ごめんね。後から顔を見せるつもりだったんだ」

「その順番に異議を唱えるぞ。女王を優先するのは当然じゃろう」

「だって、僕とマリナ女王は友達でしょ。まずは自分が所属してる国に挨拶しないとね」

「うぐぐ……言い返せぬ……」

僕の返事に悔しそうにするマリナ女王に、フィーネが苦笑する。

「マリナ女王もソファにお座りになってください。すぐにライオネル国王も来られますので」

「うむ、わかったのじゃ」

マリナ女王はこくりと頷き、アレン兄上へ顔を向け、「久しぶりじゃな」と声をかけていた。

それから少しすると、扉を開けてライオネル陛下が室内に入ってきた。

後ろから数人のメイド達も現れ、お茶会の準備を進めていく。

ソファに座ったライオネル陛下は、にこやかに話しかけてきた。

「久しいな、シオン。向こうでのことを教えてもらえるか」

「はい」

僕は帝国に到着してから今までの経緯を、要点にまとめて伝えた。

その途中、ゲスガルの名を聞いて、陛下の表情が険しくなる。

ゲスガルは王都ブリタスを管轄していた、商業ギルドのギルドマスターだ。

僕の経営するロンメル商会の利益を狙い、色々な妨害工作を仕掛けてきたが、ことごとく失敗。

不正を暴かれ更迭され、今ではラバネス半島の三国の王家に、商業ギルドからも指名手配されている犯罪者である。

タントンという街で僕を誘拐ゆうかくして殺害しようとしたせいで、リムルの怒りに触れ、今はもうこの世にはいないけど。これは僕と仲間達以外知らないことだ。

「逃げていたとは思っていたが、まさかタントンでシオンを狙うとはな。無事だったようだが……ゲスガルの身柄は確保できたのか？」

「護衛の冒険者が僕を守ってくれました。ゲスガルは既にこの世にいません」

「では、その屈強な冒険者には感謝せねばな」

「旅している冒険者のようで、偶然にも雇えたのが幸運でした」

スラスラと話しているが、冒険者の話は僕の捏造ねつぞうだ。

ゲスガルと戦ってくれたのはサイゾウだし、とどめを刺したのはリムルだからね。二人は魔族だから、話を伏せておいた。

それからダルシオン王国での一連の出来事を説明した。

話を聞き終わったマリナ女王は大きく息を吐く。

「シオンのことじゃから、大人しくしているとは思っていなかったが……ダルシオン王国とも契約を結ぶとはのう」

その横では、ライオネル陛下が満足げに頷いている。

「しかし、これでロンメル商会を通じて、我が国もダルシオン王国との繋がりができた。シオン、ご苦労だったな」

「お父様、シオンの話はそれだけじゃないの。次はイシュガルド帝国のサイフォン魔法学院に編入するって言うのよ」

「それはキツチリと話を聞かせてもらわないといけないわね」

フィーネの告げ口にセレーネ王妃は目を細める。

するとマリナ女王も大きく頷いた。

「ロンメル商会は、ラバネス半島の三国を結ぶ重要な商会じゃ。他国に奪い取られるわけにはいかんからのう」

「ラバネス半島には優秀な商会は沢山ありますよ」

「女性用の品を開発してくれる商会はシオンの商会だけでしょ。絶対にイシュガルド帝国の魔の手から死守しないとイケないわ」

僕がマリナ女王の言葉に答えると、セレーネ王妃は両手を握りしめ、真剣に断言する。

「そうよ」

「そうなのじゃ」

フィーネ、マリナ女王の二人も表情を引き締めた。

女性陣の反応に、アレン兄上は身を縮め、ライオネル陛下は引いた表情をしている。

僕は両手のひらを向けて、彼女達を宥めるように微笑んだ。

「安心してください。イシュガルド帝国やダルシオン王国にも店を置きますが、ロンメル商会の本拠地は王都ブリタスです。今回は商業ギルド東支部の計らいで、サイフォン魔法学院に編入できる機会を得ました。僕の魔法陣を試したいのはもちろんですが、諸外国の貴族の子女達と繋がりを持ちたいと思います」

「ふむ……商会の販路を広げる機会にしたいと考えているのだな。商人としてもっともな考えだが、シオンは我が王国の貴族の子息であることを忘れてはならんぞ」

「はい。しっかりとブリタニス王国のことを宣伝していきます」

「そうではなくて、商売のことばかりに集中しすぎるなって、助言をくださってるんだ」
僕の言葉に、小さな声でアレン兄上が勘違いを正してくれた。

僕達二人のやり取りを聞いて、皆が明るく笑い合う。

穏やかな雰囲気の中、お茶会は進んでいき、夕暮れ時にアレン兄上と一緒にデイルメス家の別邸へと戻ったのだった。

第2話 編入の準備

別邸に戻り、兄上に挨拶をして別れた僕は、ブリタスに構えたロンメル商会の店舗に移す。すると執務室で、レミア、アグウェル、リムルの三人が、イシュタル行き旅の準備を整えてくれた。

僕がソファに座ると、アグウェルが姿勢を正して胸に手を置く。

「帝都イシュタルでのロンメル商会の展開について、基本方針が決まりましたので、ご報告いたします」

「うん、教えてもらえるかな」

「はい。まずシオン様には魔法学院の編入試験を受けていただきます。編入後は寮りょうに住むことになりますので、侍女としてレミアが従事いたします」

「侍女は私がするって言うてるのに。私だってシオン様の近くにいたいんだから。ねー、レミア、私と代わってよ」

アグウェルの言葉に、さっそくリムルが文句を言う。

しかしアグウェルもレミアも、首を横に振った。



「リムルの意見は不採用だ。魔法学院では、年頃の生徒達——それも貴族が寮生活を送っている。リムルが侍女として学院内を歩けば、どうなるかは理解できるだろう」

「幼少の頃より、シオン様のお世話をするのは私と決まっています。この役目だけは誰にも譲りません」

「うう……イジワルー」

二人の言葉に、リムルは唇を尖らせる。

リムルは魔族の中でもサキユバスという種族で、妖艶な色香を常に漂わせている。

艶のある美女だし、肌の露出の多い衣服を好むので、生徒達には目に毒だろうな。

それにリムルには申し訳ないけど、僕としてはレミアアと一緒にの方が気楽だし、安心できる。

小さくブツブツと不平を言うリムルをそのままにして、アグウェルは話を続けた。

「帝都イシュタルで、新しい店舗を構え、ロンメル商会の帝都支部にする予定です。適任者が現れるまでは、リムルを店長といたします。シオン様の滞在される寮と店舗を転移ゲートで結べば効率的ですが、いかがされますか？」

「そうだね……魔法学院と寮の雰囲気もわからないし、最初のうちは寮の方に転移ゲートを設置するのはやめておくよ」

「えー、転移ゲートを付けようよ。それなら私もシオン様といつでも会えるし」

リムルがそう言うと思って、提案をやめたんだよ。

だって、リムルが寮に来たら騒動になりそうだからね。

するとレミアアが顎に指を当てて、悩ましげな表情をする。

「トランスベル王国の王都トラントの店舗にも、リムルには顔を出してもらわなくてはいいけません。かの国のロナウド王太子とカムシン第二王子が頻繁に店に来られていますからね」

二人の王子は、リムルの魔法で彼女のことを幼馴染だと思いつ込んでるからね。

「そういえば、リムルはこっちにいますけど、今はトラントの店は誰が店長をしてるの？」

「私が各国を放浪していた時に再会した、私の元配下でございます。レミアアと話し合い、二人で採用いたしました。ご相談もせず申し訳ございません」

「私も報告を忘れていました。すみません」

二人が僕への報告を忘れるなんて珍しいな。

まあ、アグウェルが選んだ人なら問題ないだろう。

それから三日後。

店舗運営をアグウェルに任せて、僕、レミアア、リムルの三人は、姿見の転移ゲートを使って、まずはダルシオン王国のダルトンの店舗へ移動する。

その後、馬車に乗ってイシュタルへと出発した。

なせ、転移ゲートのことを知らない人達は、僕らがダルトンにいると思っているからね。

そうして帝都イシュタルに到着した僕達三人は、その日は宿に一泊し、翌日に商業ギルド東支部の建物を訪れた。

リンメイさんの執務室に向かうと、彼女は事務処理に勤しんでいた。

僕を見ると、リンメイさんはペンを置いて、眼鏡の位置を直してにっこりと微笑む。

「やっと来たわね。さあ、ソファに座って。魔法学院関連で詳しく話したいことがあったの」

「よろしくお願ひします」

僕達三人は長ソファに並んで座り、リンメイさんも対面の席に座って、話し始めた。

「さて、もう知ってると思うけど、サイフォン魔法学院はイシュガルド帝国の建国期に作られた、グランタリア大陸でも有数の由緒正しい学校よ。だから、イシュガルド帝国や周辺諸国の高位貴族の子女達の多くが、学院に入学してくるわ。通常の入学は十二歳。シオン君はちよつと早いけど、商会ギルドのゴールドランクを持っていれば、社会的地位の保証もされることになるから、編入の資格は十分にあるわ」

「手紙に書かれていた通りですね」

「ええ。ここからは追加の情報を教えておくわね。シオン君が学院に編入すれば知ることになると思うけど」

「そこまで話して、リンメイさんは間を置いてジッと僕を見つめる。

「サイフォン魔法学院は、多額の寄付金で運営されているの」

「イシュガルド帝国の資金ではなくて寄付ですか？」

「そうなの。帝国もだけど、周辺諸国の高位貴族達が資金を出し合って、サイフォン魔法学院の理事会を組織しているの。それで、その貴族達の権力が強いよ」

「うわー、厄介そうな話ですね。なるべく関わらないようにします」

「それは無理だと思うな。元が侯爵家子息だし、そのルートじゃなくて商業ギルドからの推薦で編入するんだから、生徒達の間でも必ず噂になるはずよ。だから気をつけてね」

なるほど、それは確かに騒ぎになりそうだ。

そもそも僕は生身で魔法を使えず、《万能陣》のスキルを使うしかない。

僕の《万能陣》は、スキルで描いた魔法陣の上にある物質を、イメージ通りに変化させる能力だから、たとえば、魔法陣の上にある空気を動かして、風を操ることはできる。

でも、魔法法みたいに、何も無い空中に炎を生み出すことはできない。空気の中に酸素はあっても、燃やせるものがないから、着火させられないのだ。

他にも、空気の中の水分を利用すれば、水魔法みたいなことはできるかもしれないけど………まだ試したことはない。

いずれにしても、普通の魔法を使う人達とは、全く違うのだ。

もし編入できれば、魔法を使えない生徒として初めての入学となるだろう。

それなのに目立たないなんて無理だよな。

戸惑いを隠せないでいると、リンメイさんがニコリと微笑む。

「シオン君なら大丈夫よ。あなたは商業ギルドが公認している、ゴールドランクの商会の会長よ。商売相手だと思えば、誰とだって交渉できるでしょ」

「そうですね。ロンメル商会を広げるためにも、理事会の方々とも仲良くなってきました」

「うんうん、やっぱりシオン君は貴族よりも商人がお似合いね」

リンメイさんと話している間に不安が徐々に消えていく。

どんな機会も、チャンスに変えるのが商人だよな。

その後、リンメイさんからサイフォン魔法学院の資料を貰う。

内容を読むと、編入テストは一週間後となっていた。

僕が帝都イシュタルに来る日程を予想して、テスト日程を組んでいてくれたんだな。これは頑張らないと。

帝都で滞在している間、帝都内の空き物件を見て回ることにした。

ロンメル商会の店舗を構える土地を探すためだ。

数日見てみて、めばしい場所が見当たらないので、リンメイさんに相談しようかと思っただけ……お世話になつてばかりなので申し訳ない。

なので今回は、リンメイさんを介さずに、商業ギルドの受付に行つて、扱っている土地や売りに

出されている建物、店舗の資料を見せてもらった。

カウンターの上の書類を指差し、リムルが目を輝かせる。

「この建物がいいかも。五階建てで敷地面積も広いし、三階までを商品の販売に使って、四階は在庫置き場と倉庫、五階はシオン様の執務室と私室、他の部屋は私とレミアが使えばいいんじゃないかな」

「いい案ですね。シオン様、いかがですか？」

レミアが頷き、僕を見てくる。

「うん、いいけど、高そうだな」

「ロンメル商会の貯蓄資金を使いますので問題ありません」

僕の戸惑いにレミアはニコリと微笑む。

ラバネス半島の三国で商品展開をしている甲斐^{かひ}あつて、ロンメル商会の売上は順調だ。

資金管理はアグウェルとレミアに任せているから、彼女が問題ないと言うのであれば大丈夫だろう。

一応その足で下見をしてから、商業ギルドで売買契約を済ませ、僕達三人は泊まっている高級宿へ帰ることにした。

その翌日から、レミアとリムルの二人は、店舗の開店準備を始めた。

さつそく店のイメージに合う家具や装飾品を購入するため、帝都中の店を巡っている。

その間、僕は宿に残り、魔法学についての書物を読んで勉強に専念する。

編入テストには、座学と実技があると資料に書かれていたからね。

小さい頃から自身で魔法は使えないと理解していたので、魔法の原理を知っているだけで、専門的な勉強はほとんどしていない。

転生前の日本では一応は大学まで卒業しているし、勉強のやり方はわかっている。まあ大丈夫だろう。

第3話 編入試験

あつという間に編入テストの当日になり、僕は一人でサイフォン魔法学院へ向かった。

大きな正門を潜り、左右対称な柱が特徴的な大きな白亜の建物の玄関へ入っていく。

受付にいた女性に声をかけると、三階の学院長室へ向かうように指示されたので、階段を上って三階へ行き、長い廊下を歩いていく。

すると迷わず、『院長室』の表札を見つけることができた。

僕は片手で軽くノックをして、ゆつくりと扉を開けて室内に入る。

すると、部屋の中央に青いツーピースの服を着た女性が立っていて、窓際の重厚な机の前に、白髪の老人が座っていた。

「シオン・デイルメスです。はじめまして」

僕が挨拶をすると、女性が微笑む。

「君がシオン君ね。私はシャオリン、この学院の教師です。リンメイが目をかけるのもわかるわ。とても可愛い男の子ね」

「リンメイさんのお知り合いなんですか？」

「リンメイとは同郷なの。彼女が商業ギルドの上役になってから、あまり会っていないかったんだけどね。君を学院に編入させたいと相談をされたの。久しぶりに楽しいひと時だったわ」

僕とシャオリン先生が二人で会話をしていると、窓の方からゴホンと咳払いが聞こえてきた。

「シャオリン、雑談は後じゃ。まずワシを紹介せんか」

「すみません、この大きな机の前に座っている老人は、この魔法学院の院長先生、一応は一番偉い人よ」

「こちら、老人とか、一応とか、生徒の前で要らんことを言わんでいい。ワシはランフル・シュワドじゃ。学院長を務めておる。よろしくのう」

その名前に、僕は目を見開く。

「ランフル・シュワド先生……学院長の著作を持っています。ここに来る前に、その本で勉強し

ていました。よろしくお願いいたします」

「ふむ、礼儀を弁えたい子ではないか。もう合格でいいのではないか」

「さすがランフル学院院长、私も同意いたします」

「いやいや、編入テストはきちんと受けさせてください。実力もないのに学院に入学はできません」

ランフル学院院长とシャオリン先生が勢いで学院への編入を認めてしまいそうで、僕は両手のひらを前に出して、慌てて止める。

ランフル学院院长は、グランタリア大陸では五本の指に入るほどの魔法の大家だ。

偉い方なのはわかるけど、学院院长がいい加減に生徒の入学を認めたら駄目だろ。

二人の人柄がいいのはわかったけど、少し不安だな。

「では、試験を行う教室に行きましょう。私が案内するわ」

シャオリン先生に促され、二人で院長室を出た。

階段を降り、二階の教室に向かう間、シャオリン先生は自分のことを教えてくれた。

彼女は魔道具開発を教える教師らしい。

だから、リンメイさんから僕が魔法陣を扱うと聞いて、興味を持ったんだとか。

シャオリン先生の話では、在籍している生徒達は、全員が普通に魔法を使う魔法使い——魔法

士だ。

いや、魔法学院なんだから、それは当然か。

ただし、この学院では魔法の他に、錬金術や魔道具開発の授業もあるそうだ。

魔法の授業は全生徒が受けることになっており、魔法陣、錬金術、魔道具開発は選択制の科目となっていて、興味のある生徒だけが受講するらしい。

それで、選択科目の授業は生徒達から不人気だという。

シャオリン先生の授業に興味もあるし、僕には《万能陣》のスキルがあるから、選択科目も受けてみようかな。

そんなことを考えているうちに、試験会場だという教室に着いた。

教室に入った僕は席に着き、シャオリン先生から試験用紙を受け取る。

制限時間は一時間。

その間に、四枚の問題を解いていく。

宿で勉強していたおかげで、スラスラと解答できた。

「できました」

「では採点するわね」

シャオリン先生は、机の上に置いてあった解答用紙を手に取り、視線を移動させていく。

そして四枚目まで終わると、シャオリン先生は満面の笑みを浮かべた。

「九十八点。最後の問題だけ少し勘違いしたようね。編入テストは一般の入試よりも難しいのに、ほぼ満点を取るなんて、すごく優秀よ」

そう言われ、僕は小さくガッツポーズする。

「座学は合格です。では次に、実技試験の会場へ向かいましょうか」

「実技ですが、僕は魔法陣を描いて魔法を発動することしかできません。それでも合格できるんですか？」

僕は思わず、そう言っていた。

僕の前世の記憶にあるファンタジー作品では、異世界の魔法学院は、生徒全員が卓越した魔法を使っていた。

リンメイさんには大丈夫と言われたけど不安なんだよね。

僕の問いに、シャオリン先生は穏やかに微笑む。

「リンメイから聞いてるわ。確かに、サイフォン魔法学院に在籍する生徒のほぼ全員は魔法士ね。でも、魔法学院は魔法を学問として学ぶ場よ。だから基本的には、どんな方法を用いても魔法を発動できるのなら、魔法の原理や構造を勉強できる学院であるはずなの。今の生徒達は勘違いしているようだけどね」

「そうだったんですか。僕も勘違いしていました、すみません」

「いいのよ。今言ったのはランフル学院長の方針で、生徒を分け隔てなく受け入れたいと考えて

いるわ。一方で理事会は、優秀な魔法の才能のある子達——そのほとんどが高位貴族の子女なんだけど、彼らを集めて高等な魔法教育を施すところが、魔法学院の権威を保つ方法だと考えているのよ。だから私はリンメイから君の件について相談を受けた時、編入させたいと思ったの」

なるほど、学院長の方針と、理事会の方針が対立しているのか。

もし僕が入学することになったら、厄介なことになるような気もするけど……そうだった時は、学院を辞めればいだけか。

あまり深く考えないようにしよう。

校舎の裏に出ると、広い訓練場的が設置されていた。

シャオリン先生は的を指差す。

「どんな魔法を使ってもいいから、あの的を壊してみせて。それで実技は合格よ」

「魔法陣を使ってもいいんですよね」

「もちろんよ、手段は問わないわ」

僕は肩掛け鞆かばんの中から、以前《万能陣》で作った、【暴風】の魔法陣が描かれた羊皮紙を取り出し、的に向けた。

「いけ！ 暴風！ 破壊しろ！」

僕の体から魔力が抜け、魔法陣から竜巻が生まれ、的へと襲いかかる。

一瞬で的はバキバキと碎け、暴風と共に空の彼方へと消えていった。

ちよつと、やり過ぎたかも……

ヤバいかなと思ひ、チラリとシャオリン先生の表情を窺うと、的のあつた位置を、目を大きく開いて見つめている。

「これでいいですか？」

「も……もちろんよ。予想以上の破壊力だったわ。これなら学院長から合格を貰えるわね」
ふー、テストだと思つて、多めに魔力を込めてしまった。

とにかく上手くいったからいいよね。

校舎に戻り、学院長室でシャオリン先生が学院長に試験結果を伝える。

すると学院長は椅子から立ち上がり、僕の方へ歩いてきて、僕の両手を優しく握った。

「シオン君、編入試験に見事合格じゃ。サイフォン魔法学院の一年生として編入を認める。明日にでも寮に引越してきなさい。手続きの詳細については全てシャオリン先生に一任しておる。これからも勉学に励むようにのう」

「ありがとうございます」

僕はペコリと頭を下げてお礼を言い、その後三人で少し雑談した後、学院を後にした。

宿に戻り、合格を伝えると、レミアアとリムルがすごく喜んでくれた。

「さすがはシオン様です。これからも身命を賭してお仕えいたします」

「私も、ずーっとシオン様と一緒にいるー」

それから合格祝いを開くことになり、宿の豪華な料理をお腹がパンパンになるまで堪能したのだった。

翌日、僕とレミアアは大きな鞆に荷物を詰め、サイフォン魔法学院へと向かった。

正門を警護している兵士のおじさんに寮の場所を聞いて向かう。

二人で歩いていくと、三階建ての大きな建物が見えてきた。

貴族の邸宅と言ってもいいような豪華な寮だな。さすがは大陸中の高位貴族の子女達が暮らしているだけあるよね。

寮の玄関に入ると、管理人室があった。

レミアアが受付にいる管理人に書類を手渡し、入寮の手続きを済ませる。

書類を確認した管理人はニコリと笑い、僕の部屋の鍵を渡してくれた。

割り当てられた部屋は、三階の奥にあった。

玄関から一番遠いので、生徒達からは不人気で空き部屋になっていたらしい。

あまり生徒の行き来はないはずだから、僕としては都合がいい。そのうちここにもゲートを設置するかもしれないからね。

授業をしている時間帯なので、通路を歩いている生徒はいなかった。

扉の鍵を開けて中に入ると、大きなリビング、綺麗なダイニング、浴室にはシャワーもあり、従者用の部屋まで設置されていた。

「うわー、設備が充実しているね」

「ベッドもキングサイズです。これならシオン様と一緒にゆつくりと眠れますね」

「待つて待つて、従者用の部屋にも綺麗なベッドがあるでしょ」

「駄目です。シオン様の体調を管理するのが私の務めですから」

そう言ってレミアは譲らない。

邸や店舗で暮らしている時は、父上やアグウェルに注意され、レミアは別室で眠っている。でもここは、寮だから彼女を注意してくれる人はいない。

一緒に寝てもいいんだけど……ドキドキして眠れないんだよね。

僕はレミアを寮に残し、一人で校舎に向かった。

手続きが済んだら来るように言われていたからだ。

三階にある学院長室へ赴くと、シャオリン先生が待つていてくれた。

「シャオリン先生、昨日はありがとうございました。無事に寮に入ることができました」

「では、シオン君に君の所属するクラスを案内するわ。一緒に行きましょう」

奥の机で仕事をしていたランフル学院長も、ニッコリと微笑む。

「しっかりと頑張るんじゃぞ」

「ありがとうございます」

僕は学院長にお礼を言い、退室してシャオリン先生と二人で廊下を歩いていく。

時折、生徒達が廊下を通り、先生に頭を下げて静かに去っていった。

通路に飾ってある絵画を眺めながら歩いていると、シャオリン先生が声をかけてきた。

「シオン君のクラスは一年生のSクラスよ。学年の中で、最も優秀な生徒がSクラスに集まっているの。頑張ってね」

「僕は編入生ですよ。大丈夫なんですか？」

「シオン君の座学の試験結果は、学院の中でもトップクラスよ。自信を持っていいわ……ただ、Sクラスの生徒達は高位貴族の子女が多いから、彼等のプライドを傷つけないように注意してね」

「善処します……」

確かに、高位貴族の子女といえば、プライドが高そうなイメージもある。

でもフィーネは王家の姫で、マリナ女王は一国の女王だけど、気さくで可愛い女子だよね……王族だから、ちょっと違うのかな。

まあ、アレン兄上も高位貴族の息子だけど、気取ってもいない。それで言うとな僕も高位貴族の息子だしね。

できれば気軽に会話できる友人ができたら嬉しいな。
シャオリン先生は少し歩みを遅くして、話を続けた。

「Sクラスの担任教諭はウエルム先生と言って、魔法士^{ひじき}傭^{ひき}だから、ちょっと気難しいところもあるけど仲良くやってね」

「……魔法を扱えない僕を認めてくれるんでしょうか？」

「それは大丈夫よ。個人的な思想と、学問とを区別できる人だから。シオン君の担当を受け持つのも、ウエルム先生からの提案なの。生徒達には人気のある先生だから安心していいわ」

そうなんですかと納得できないんですけど、不安でしかないな。

なんて話しているうちに、Sクラスの教室に到着した。

扉を開けてシャオリン先生がウエルム先生に会釈する。

「シオン・デイルメス君をお連れしました。後はお任せします」

「わかった。シオン、ここに来てクラスの皆に自己紹介するように」

「よろしくお願ひします」

シャオリン先生が去っていくのを見届けて、僕は教壇まで歩いていき、ウエルム先生の隣に並び、教室の中を眺める。

Sクラスの生徒は僕の他に六名。女子が二人に男子が四人だ。

思っていたよりも人数が少ないな。彼らはみんな、十二歳のはず。

息を整え、僕は笑みを浮かべる。

「今日より、このクラスに編入するシオン・デイルメスです。ラバネス半島の南端にあるブリタニス王国から来ました。よろしくお願ひします」

「チツ、ラバネス半島の田舎^{いなか}貴族の息子か。Sクラスに入ってくるなよ」

ツンツン頭の男子が、舌打ちをして表情を歪める。

グランタリア大陸の内陸部の国々の貴族は、ラバネス半島のことを田舎^{べつし}と蔑^{べつ}視する傾向があるのは知ってたけど……今の言葉、忘れないからね。

すると、僕の隣のウエルム先生がニヤリと頬を歪めた。

「カイロス、言い過ぎだ。シオンは編入試験で九十八点を出した秀才だ。魔法を使えないそうだが、魔法陣は扱えるそうさ。座学だけはSクラスに迎えるだけの実力はある。あくまで座学だけだがな」

「ウエルム先生、魔法も使えないような生徒を、伝統あるサイフォン魔法学院の生徒として認めてもよろしいのでしょうか？ 理事会の方針とは違いますが」

「カイロス、私は学院に雇われた教職員でしかない。ランフル学院長の方針には逆らえんのだ。

学院長は、魔法の才のない者達にまで、魔法を学問として教授させたいと考えておられる心優しい方だ……^{はなは}甚だ迷惑であるがな」

そこまで話し、ウエルム先生は僕のことをジロツと^{ぼん}眺む。

「シオン・デイルメス、くれぐれも他の優秀な生徒に迷惑をかけるな。一番奥の席で座学を受けるようにしろ。魔法実技の授業には出席しなくてもいい。その時間は、他の科目を選択して、授業を受ける。では席に座りなさい」

「はい、よろしく願います」

シャオリン先生、話が違うじゃないですか。

ウエルム先生は、僕をSクラスにふさわしい生徒だなんて思っていないですよ。

でも……魔法実技の授業に出なくていいのは少し嬉しいな。どうせできることはないわけだし。

違う科目の授業も受けられるなら、どの授業を受けようかな。

魔道具開発の授業なんていいかもしれない。商品開発なら慣れているからね。

席に座って横を見ると、茶髪のゆるふわヘアの女の子が笑いながら小さく手を振っている。

僕も手を振ると、彼女は体を横に滑らせ、小声で話しかけてきた。

「ウエルム先生は、優秀な魔法士集団が世界を統べるべきと考えている人だから、あまり気を落と

さなくていいわ。このサイフォン魔法学院には、そういう思想の先生が多いの。私はランフル学院の方が好きだけどね」

「教えてくれてありがとう。僕の名はシオン。よろしくね」

「私の名前はシャルロットよ。学院のことでわからないことがあったら、気軽に声をかけてね」

座席の隣の生徒が、気さくな子でよかった。

シャルロットみたいな生徒もいるんだな。

彼女と友人になれば、学院生活も楽しくなるかも。

第4話 Sクラス

編入初日は戸惑いもあったが、三日が経ち、教室の雰囲気にも慣れてきた。

シャルロットとは休憩時間になる度に少し会話をし、ちよつと仲良くなれた気がする。

サイフォン魔法学院の授業の時間割は、午前中に二回、昼休憩を挟んで午後一回だ。

今は限目の授業が終わり、次の魔法実技の授業の準備をしている。

ただ、ウエルム先生から、魔法実技の授業は出席しなくていいと言われている。

だからこの空き時間に、選択科目の授業がある場合は、その授業を受けてもいい。

今日は何の授業があるのかと考えていると、教室の前方からカイロスが歩いてきた。

先日、シャルロットに教えてもらったんだけど、カイロスはアシラム王国の王太子らしい。

当のシャルロットも、このイシュガルド帝国の第三王女だという。

僕の前まで歩いてきたカイロスが、ジロリと睨んでくる。

「シオン、シャルロットに気安く近づくな」

「隣の席だから、学院について教えてもらってるだけだけど。それがまずいの？」

「半島の田舎貴族の癖に言い返してくるな。いいから俺の指示に従えばいいんだ」

カイロスはイライラしたように、眉を蹙めて足で床を叩く。

編入初日にもラバナス半島を田舎と馬鹿にされたことを思い出し、僕は内心でムツと腹を立てた。すると隣で僕達の様子を見ていたシャルロットが、僕より早くカイロスに言い返す。

「アッシュラム王国だって田舎じゃん。それに私が誰と話してもカイロスに關係ないでしょ」

「イシユガルド帝国の第三王女殿下であるシャルロットが、こんな田舎者の相手なんてする必要ないんだ」

「カイロス、うるさい。シオンは選択科目へ行くんでしょ。私が案内してあげる」

シャルロットは僕の手を握って、強引に席を立ててスタスタと歩き出す。

後をチラリと振り返ると、カイロスが僕を睨んでいた。

もしかすると、カイロスはシャルロットに好意があるのかな？

そうなると、この状況はまずいような？

シャルロットが前を向いたまま教室を出ていくのにひっぱられて、僕も廊下へと出た。

すると、シャルロットが大袈裟に溜息をついた。

「カイロスって、いつも私の行動を細かく注意してくるのよね。いちいちうるさいっつーの」

「それだけ友人として気にかけているんじゃないのかな」

「どうだか。他の皆もほとんど貴族の子女なんだから、そっちにも言えばいいのに。私だけに言わないでほしいわ」

そういえばシャルロットはイシユガルド帝国のお姫様だった。

気安く手を繋いでいるけどまずいよね。

パツと手を離して腕を引くと、シャルロットは立ち止まって僕を見つめる。

「身分や立場なんて關係ないわ。シオンはシオンでしょ」

どうやら、僕が手を振りほどいた理由を察したようだ。

「そうだけど……」

「選択授業に行くんでしょ。今日は魔道具開発の授業があるみたいよ。このまま廊下で話していたら遅れちゃうわ」

シャルロットは強引に僕の手を掴んで、楽しそうに歩いていく。

教室の扉を開けると、シャオリン先生が演台の前に立っていた。

「シャルロットさんとシオン君、講義を受けに来てくれたのね」

「シャオリン先生、よろしくお願ひします」

先生に会釈して、急いで空いている席に着く。

教室内を見回すと、数人の生徒がポツリポツリと座っていた。

思っていたよりも人数が少ない。

不思議に思っていると、シャルロットが耳元でそっと囁いた。

「この学院には、ウエルム先生と同じ考えの先生が多いと言ったでしょ。だから魔法に自信のある生徒は、魔道具開発や魔法陣の授業なんて受けないわ。先生達も推奨してないのよ」

「でもシャルロットは興味があるんだよね？ 魔法が苦手なの？」

「魔法量は学院の中でも多い方だし、魔法も使えるわ。でも私は魔法より魔法陣の勉強の方が楽しいのよね。呪文詠唱の言葉を覚えるより、どんな魔法陣を描くか考えているの方が好きなの」

魔法を發動する詠唱の言葉は、順番や法則が決まっている。

魔法陣も規則性はあるけど、自分で自由に構築できるのだ。

シャルロットが楽しいと思うのも頷ける。僕も《万能陣》を描く時、ワクワクするからね。すると黒板の前に立ったシャオリン先生が、僕に声をかける。

「そういえばシオン君、編入試験の時、変わった魔法陣を使っていたわね。魔法陣の構築が得意なのかね」

「僕の魔法陣は、《万能陣》という僕の固有スキルで描いています。通常の魔法陣は勉強していますが、基礎知識しかありません」

「なるほど。魔道具開発には魔法陣は必須の技術ですから、基礎から説明していきますね。他の生徒も、もう一度、自分の知識に間違いがないか、きちんと復習していきましょう」

シャオリン先生の言葉に、「はい」と生徒達が返事をする。

父上の蔵書やアレン兄上の教本で魔法陣の構築を独学しているけど、教師に習うのは初めてだ。しっかりと覚えて《万能陣》に応用したい。

それからシャオリン先生は、魔法陣の構築について丁寧に語っていく。時には冗談も交えて教えてくれるので、授業がとても楽しい。

黒板に書かれた文章や図を羊皮紙に書き写し、シャオリン先生の説明を聞いているうちに、あつという間に授業終了の時間となった。

教材を片付けていると、シャオリン先生が歩み寄ってくる。

「今日は魔法陣の基礎を説明したけど、普段は色々な魔道具を想定して、皆の意見を聞きながら、その内部構造を構築しているの。だからシオン君も遠慮せず、どんなアイデアを出してね。わからない点があれば、私の執務室に来てくれれば、いつでも教えるから」

「ありがとうございます。魔法陣の応用方法を聞きに行ってもいいですか？」

僕の言葉にシャオリン先生が頷くと、隣に座っていたシャルロットが目を輝かせる。

「先生、シオンが教わりに行く時、私も一緒に聞いてもいいでしょ」

「いいわよ。可愛い生徒は大歓迎。いつでもいらっしゃら」

シャオリン先生はニコリと微笑む。

そして僕達に背を向け、教室を出ていった。